マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所　弁理士◇葦原 エミ

Vol.24 「たかが、されど」で年は暮れ

とーとつですが、問題です。この記事は何文字でできているでしょうか？（正解は下。当たった方、きっと何か良いことがありますっ！）

たかが１ページ、されど１ページ。これを毎月書くのは大変だ、と知るのは連載開始後だった。何しろ、字数制限がある。ある時は300字多く、またある時は100字足りない。うう、と唸っていたら、編集さんから「好きに書いてください。こちらで調整しますから」。

そうなのだ。編集さんというのは素晴らしい！　筆者のべた打ちがきれいなレイアウトになって初校が戻る。この辺カット、この辺足して、とか。

が、戦うこともある。「１行削ってください」と言われて、左コラムから削ったら、「左はそのままで、右を削ってください」。

「えっ……」

使いたい文字「たまねぎ」が「タマネギ」に修正されたことも（『新聞用字用語集』では動植物の名称は片仮名書きが原則だそうで）。

ひと言でも自分の文章でないものはすぐ違和感を覚え、絶対譲らないこともあるが、これも相性があるみたいで、新しい担当者さんの直しが入ったときは、「すごい、この人、私か？」と思ったことも。

そもそも、なんでこんな連載が始まったかといえば、編集長と別の記事についてやり取りしていた時、「なんか書きませんか？」と誘っていただいたと記憶している（編集長は、「いや、書きたいって言ってたから」と言っているが、そんなことはない）。

そして、「葦原がフランス風カフェでブログを書く」という設定が決まる。それでも、最初は律義に知財ネタを書いていたが、ある日、気がつく。

「他の人、みんな知財のことを書いてますよね（当たり前だ、「発明」誌だから）。知財から離れてもいいですか？」と筆者。「最初から『いい』って言ってたじゃないですか！」と編集長。かくして、内容は完全に筆者に委ねられた。「自由というのはつらいもの」と知るのは後のこと。

読んでいただいた方々からいろんなことを聞かれる。

「ゴーストライターとか、いるんですか？」

いません！　エピソードも全部、実話です！

「ネタ帳、作ってます？」

はっとひらめいた時、手帳に１行書いてます。

月イチの締め切りはきつい。結構、法定期限以外は守らない弁理士が多いなか、真面目な筆者は聞いてみた。

「あのぉ、締め切りって少し途過しても大丈夫ですか？」

「ダメに決まってるじゃないですか！」（編集長）

そりゃそうですよね。で、締め切りは死守する。午前１時。書けない。。。午前２時。仕方ない、ワインでも飲むか。午前３時。やっとノッてきた！　ということもある。言葉が天から降ってくるって感じ？

写真にもエピソードがある。「カフェで」という設定だから、霞が関のカフェにお願いして、開店前に撮影させていただいた。

が、「撮ってもらった写真はどれも気に入らない」と言ったら、「だったら連載はなしです！」と。２年目は筆者が撮った写真でお願いしたら、「アイドル路線を目指してます？」とボツになったり。。。フランスの新聞調の背景も実は……と、筆者はいろいろ遊んでみたりもしている。

３カ月続くかな？　と思っていた本稿は３年目に突入します！　来年もどうぞよろしく♥

※ハートマークを入れて全1286文字です。